

第 5 章

研究のまとめ

研究のまとめ

1 各学部の取り組みのまとめ

今年度はまず、個別の指導計画に記載されている実態を目標設定や指導により活かせるものにするために、各学部ごとに児童生徒の実態を把握する際に必要だと思われる視点について各学部で改めて検討、設定をした。その視点をもとに、現在作成している個別の指導計画の実態の部分について見直しを行った。

1-1 小学部の取り組みについて

<実態把握に取り入れた視点>

- ・児童の「よさ」：得意なこと、興味関心
- ・困っていること・苦手なこと：本人が困っていることや苦手なこと、保護者や教員が「こうなってほしい」と考えていること
- ・指導に活かせる実態：「こういう場面で、こういう支援があれば、ここまでできる」というような、条件や手だてを含めたできること

<わかってきたこと>

成果 ・「困っていること、苦手なこと」は、その原因を考えて記録することで、実態から目標へのつながりが見えやすくなることがわかってきた。また、原因を考えることで目標に取り上げられる点、障害特性等の環境設定などで配慮すべき点が整理されるのではないか、ということがみえてきた。

・「よさ」は指導の手だてに活かすことができる、ということが再確認された。

・「指導に活かせる実態」は条件や手だてを含めて具体的に示すことで、次の目標が考えやすくなるのではないか、ということがみえてきた。

課題 ・「よさ」と「指導に活かせる実態」をわけることが難しい。⇒どんな点が目標につながり、どんな点が指導の手だてや支援につながるのかを整理していく。

・成長が速い時期の児童の変化に合わせて、見直し、修正をどのようにしていくか。

<今後すすめていきたいこと>

・前後期の授業の目標を設定するにあたり、教科等の授業計画から考える部分と個人の実態から考える部分をどのように考えるか、年間指導目標がどのように前後期の目標につながるのか、整理していくこと。

・個別の指導計画の見直し、修正の Spann や方法を検討していく。

1-2 中学部の取り組みについて

<実態把握に取り入れた視点>

- ・「強み」：「行動の基となる能力（主体的な行動の基となる生徒の長所・特徴である力）」と、その力を発揮するための「支援の方法と程度」
- ・「弱み」：将来に向けて引き上げたい「ひきあげる力」と、障害特性や環境などが要因となり、配慮や支援が必要となる「おぎなう力」

<目標設定までに取り入れた視点>

- ・指導仮説：「強み」と「弱み」をもとに、どのような支援を、どの程度することで、どの力が発揮され／成長し、どのようなことができるようになるか

<わかってきたこと>

成果 ・実態の整理や分析に、「強み」と「弱み」の視点を設定することで、より効果的に「強み」を活かして「弱み」にアプローチし、生徒が力を発揮し活躍できる授業につながる目標設定ができる。

- ・「弱み」を「ひきあげる力」と「おぎなう力」として見とることで、目標設定の妥当性を高め、また「弱み」のより深い原因や理由を考えることができる。
- ・「指導仮説」を明文化することで、目標や支援の根拠を明確にすることができる。

課題 ・「ひきあげる力」と「おぎなう力」を分けること。

→担任の裁量。学部教員で検討することで根拠をもたせる。

- ・「強み」と「弱み」は特定の状況において、それぞれ力や課題としてとらえられるため、「どのような状況で」という点をより明確にする必要がある。

<今後すすめていきたいこと>

- ・学部での目標の検討や評価の仕方について、どのような方法が有効かを検討していく。
- ・「強み」と「弱み」のとらえ方の「どのような状況で」という点を明確にするために、実際に来年度の目標設定をこの仕組みをもとに行い、評価を通して有効性を検証し、改善を図っていく。

1-3 高等部の取り組みについて

<実態把握に取り入れた視点>

- ・「〇〇（支援）すると、～できる。」「〇〇（場面、状況、相手）では、～できる。」など、手だてに活かせる実態を具体的に記述する。
- ・生徒の個人内差における「強み」と「弱み」を整理して記述する。
さらに、目標だてしない弱みは、健康上及び障害特性による配慮事項を分けて記述する。

<目標設定に取り入れた視点>

- ・将来像にかかわる現時点での実態に、「できていること」と「課題」に分けて記述するという決まりを設定する。
- ・将来像に関わる現時点での実態から「23～25歳までに高める必要のある力」を設定し、さらに目標とするための優先順位をつける。
- ・「23～25歳までに高める必要のある力」を基に長期目標を設定し、さらにそこから年間指導目標を検討することにした。

<分かってきたこと>

- 成果
- ・どのような場面で支援や配慮が必要なのか、どのような状況ならばできるのか、どのような力が手だてとしていさせるか等が明確になり、指導の手だてを考える際に活用しやすくなった。
 - ・強みと弱みにそれぞれ記号をつけて記載したことにより、その生徒の特性が一目でわかるようになった。
 - ・どの部分や、どの段階からアプローチしたらよいのかが以前よりも明確になった。
 - ・取り組む優先順位の高い目標から確実に絞り込むことができるようになった。
 - ・将来像から長期目標、年間目標へのつながりが見えやすくなり、段階的な目標の積み上げ方が検討しやすくなった。

- 課題
- ・「強み」「弱み」「配慮事項」についての捉え方を明確にする。
 - ・個別の指導計画(年間)①に書かれた実態を授業実践につなげる方法について検討する。

<今後進めていきたいこと>

- ・「強み」「弱み」「配慮事項」の捉え方を学部で統一する。
- ・改善した年間指導目標設定のためのワークシートや個別の指導計画の実態を活用し、設定した目標や手だてを実践につなげられるようにする。

1-4 各学部の共通点と相違点

児童生徒の実態を把握する際に設定した視点として、「児童生徒の得意な面、強みとして発揮される面について捉える」ということが小中高、どの学部からも挙げられた。そして、それを指導の手だてを考える際に活用するという点も3学部に通ずるものだった。また、「児童生徒が困っていたり、苦手としていたり弱みとして現れる面について捉える」こと、その原因を考え、障害特性が要因となる部分を配慮したり、支援が必要である点としておさえたりすることも、3つの学部から挙げられた。さらに、児童生徒の実態を単に「～ができる」「～は難しい」と捉えるのではなく、「○○(場面、状況、相手)では、～できる。」「○○(支援)すると、～できる。」など、条件や支援などを併せて実態を捉えることで、目標設定(目標・手だて)に活かしやすくなるということも共通して挙げられた。

児童生徒の実態を把握する際の視点や考え方には、3つの学部で共通する部分も多かった。しかし、把握した実態から目標を設定していく際には、将来を見据えた「将来像」との関わり方の違いなどから、各学部においてその道筋の違いが見られた。

	共通する部分	学部ごとに異なる部分
小学部	◎児童生徒の得意な面、強みとして発揮される面について捉えること 「実態」の把握→「手立て」手がかかり	<ul style="list-style-type: none"> ・ 目標設定までの道筋 ・ 目標と将来を見据えた「将来像」との関わり方
中学部	◎児童生徒が困っていたり、苦手としていたり弱みとして現れる面について捉えること その原因を考え、障害特性が要因となる部分を配慮 支援が必要である点としておさえる	
高等部	◎条件や支援などを併せて実態を捉えること、 目標設定（目標・手だて）に活かす	

表 1 各学部の共通する点、相違点

2 今後の方向性

今年度は、実態把握から目標設定に焦点をあてた一次の取り組みの途中であり、各学部の取り組みを報告し合った結果、同じような視点や考え方が出されたが言葉や定義などはまだ統一されていない。今後は、各学部の取り組みを整理していくことで、児童生徒の目標や手だてを考える際に全校共通で大事にしたい点と、それぞれの学部段階で大事にしたい点が見えてくるのではないかと考える。

今年度は実態把握から年間指導目標を考えるところまでについて取り組んできた。今後は、授業実践につなげるために、前後期の各授業における目標の設定までの考え方を整理することに取り組んでいき、ここまでを一次の取り組みとして、来年度に成果と課題をまとめていきたい。

学部	取り入れた視点
小学部	<p><実態把握に取り入れた視点></p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童の「よさ」：得意なこと、興味関心 ・困っていること・苦手なこと：本人が困っていることや苦手なこと、保護者や教員が「こうなってほしい」と考えていること ・指導に活かせる実態：「こういう場面で、こういう支援があれば、ここまでできる」というような、条件や手だてを含めたできること
中学部	<p><実態把握に取り入れた視点></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「強み」：「行動の基となる能力（主体的な行動の基となる生徒の長所・特徴である力）」と、その力を発揮するための「支援の方法と程度」 ・「弱み」：将来に向けて引き上げたい「ひきあげる力」と、障害特性や環境などが要因となり、配慮や支援が必要となる「おぎなう力」 <p><目標設定までに取り入れた視点></p> <ul style="list-style-type: none"> ・指導仮説：「強み」と「弱み」をもとに、どのような支援を、どの程度することで、どの力が発揮され／成長し、どのようなことができるようになるか
高等部	<p><実態把握に取り入れた視点></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「〇〇（支援）すると、～できる。」「〇〇（場面、状況、相手）では、～できる。」など、手だてに活かせる実態を具体的に記述する。 ・生徒の個人内差における「強み」と「弱み」を整理して記述する。さらに、目標だてしない弱みは、健康上及び障害特性による配慮事項を分けて記述する。 <p><目標設定に取り入れた視点></p> <ul style="list-style-type: none"> ・将来像にかかわる現時点での実態に、「できていること」と「課題」に分けて記述するという決まりを設定する。 ・将来像に関わる現時点での実態から「23～25歳までに高める必要のある力」を設定し、さらに目標とするための優先順位をつける。 ・「23～25歳までに高める必要のある力」を基に長期目標を設定し、さらにそこから年間指導目標を検討することにした。

<引用・参考文献>

全体

- 1) 全国特別支援学校知的障害教育校長会. 新しい教育課程と学習活動Q & A特別支援教育〔知的障害教育〕. 東洋館出版社. 2010
- 2) 海津亜希子. 個別の指導計画作成ハンドブック. 日本文化科学社. 2007
- 3) 石塚謙二. 全国特別支援学校知的障害教育校長会. 知的障害教育における専門性の向上と実際 知的障害教育指導の充実と人材育成を目指して. ジアース教育新社. 2012
- 4) 文部科学省HP. 次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについて(報告). 2016
- 5) 文部科学省. 特別支援学校学習指導要領解説. 教育出版. 2009

小学部

- 1) 文部科学省. 特別支援学校学習指導要領解説. 教育出版. 2009
- 2) 独立行政法人国立特殊教育総合研究所. 世界保健機構(WHO). ICF(国際生活機能分類)活用の試み 障害のある子どもの支援を中心に. ジアース教育新社. 2005
- 3) 山口県教育委員会HP. 「自立活動の指導の手びき」について 資料版.
<http://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cms/a503001/induction/jiritsu.html>. 2014
- 4) 独立行政法人国立特殊教育総合研究所. 「育成を目指す資質・能力」をはぐくむための知的障害教育における学習評価の実践ガイド. ジアース教育新社. 2016
- 5) 須田正信. 基礎からわかる特別支援教育とアセスメント. 明治図書. 2009
- 6) 独立行政法人国立特殊教育総合研究所HP. 特別支援学校の教育(3)自立活動と個別の指導計画の作成. <http://www.nise.go.jp/cms/13,0,55,251.html>. 2011

中学部

- 1) 石塚謙二. 全国特別支援学校知的障害教育校長会. 知的障害教育における専門性の向上と実際 知的障害教育指導の充実と人材育成を目指して. ジアース教育新社. 2012
- 2) 石塚謙二. 全国特別支援学校知的障害教育校長会. 知的障害教育における学習評価の方法と実際 子ども確かな成長を目指して. 2011
- 3) 福島大学附属特別支援学校. 授業づくりのサポートシステム. 2013

- 4) 山形大学附属特別支援学校. 研究報告. 2014
- 5) 鹿児島大学教育学部附属特別支援学校. 研究紀要第 17 集 今を, 将来をよりよく生きる子どもを目指した授業づくり. 2009
- 6) 埼玉大学教育学部附属特別支援学校. 研究集録 38 知的障害のある生徒へのキャリア教育の在り方を探る—児童生徒の「自己実現」をめざす取り組み—(1年次). 2010
- 7) 埼玉大学教育学部附属特別支援学校. 研究集録 39 知的障害のある生徒へのキャリア教育の在り方を探る—児童生徒の「自己実現」をめざす取り組み—(2年次). 2011
- 8) 埼玉大学教育学部附属特別支援学校. 研究集録 40 知的障害のある生徒へのキャリア教育の在り方を探る—児童生徒の「自己実現」をめざす取り組み—(3年次). 2012
- 9) 先崎正次郎. 斎藤一雄. 総合学習のすすめ 知的障害教育課程論. 共同出版. 2013

高等部

- 1) 文部科学省. 特別支援学校学習指導要領解説. 自立活動編(幼稚部・小学部・中学部・高等部). 海文堂出版. 2009
- 2) 埼玉大学教育学部附属特別支援学校. 研究集録 知的障害のある児童生徒へのキャリア教育の在り方を探る—児童生徒の「自己実現」をめざす取り組み—(3年次). 2012
- 3) 埼玉県教育委員会. 埼玉県特別支援教育指導資料【自立活動の指導資料】. 2011
- 4) 坂爪一幸・湯汲英史. 知的障害 発達障害のある人への合理的配慮 自立のためのコミュニケーション支援. かもがわ出版. 2015

お わ り に

副校長 神田 佳明

本年度から「一人一人が力を発揮し、活躍する授業づくり～実態把握からの目標設定と、評価のフィードバックを通して～」を3年間の学校研究テーマとして掲げ、新たな教育実践研究のスタートを切りました。

キャリア教育を軸として進めた前研究の中で散見された「適切な実態把握と目標設定の在り方」、「授業の中で一人一人が力を発揮するための課題設定」等について、きちんと共通理解をもって進めること、そしてそもそも「適切な実態把握とはどのようなべきか」、「妥当な目標設定や課題設定はいかに導き出されるのか」など、基本部分について本研究ではメスを入れることにしました。

どの特別支援学校でもすでに活用されている個別の指導計画ではありますが、それぞれの指導計画に記される実態や目標について、これまでの記載内容を見直し、評価や反省を加えていく作業は、どちらかという地味な作業であり、担任たちも自戒の念をもって評価・反省していく中で、学部として意見を出し合い、少しずつ改善点を見いだすと共に学部としての共通理解も深まりました。一貫した指導・支援に資するために本校の個別の指導計画も全学部共通の書式ではありますが、各学部の教育課程や前研究で進めてきた将来像の位置づけが異なるため、学部ごとのアプローチも異なりました。その中で独自のワークシートを開発しながら、共通の新たな視点・仕組み作りを目指しました。小学部では「3つの共通の視点」、中学部では「強み・弱みの視点」高等部では「年間指導目標設定のためのワークシートの改訂」などがそれにあたります。

3年研究の1年目という点で、目に見える成果としては決して多くはないのですが、教師の本分である授業づくりについてじっくり考える年になったと思います。

新学習指導要領の考え方が示され、子どもたちの資質・能力の向上やカリキュラムマネジメントの重要性が柱と示されている中、その延長上に私たちの進める研究で目指す「一人一人が力を発揮し、活躍する姿」があると考えます。

個別の指導計画の考え方が示されて10余年。特別な教育的支援を要する児童生徒にとって必須の個別の指導計画が、単なる「作成すべき書類」でなく、子どもたちの力を伸ばし、可能性を引き出す、真に有効なツールとして、そして子どもたち一人一人の学校生活全般をマネジメントするツールとして機能させることを目指したいと思います。

末筆ではありますが、本年度の研究を進めるにあたっては県教育局県立学校部特別支援教育課 楠奥佳二先生をはじめ、県立総合教育センター 多田明彦先生、船津昭平先生、本学教育学部 葉石光一先生、中下富子先生、准教授 名越斉子先生、山中冴子先生、埼玉県立吉川南高等学校 山田直子先生には、大変ご多用の中、懇切丁寧にご指導賜りました。ここで改めてお礼申し上げるとともに、本研究の成果を子どもたちの更なる成長の姿をもってお示ししたいと思います。

研究同人

【 校 長 】 尾崎 啓子

【 副校長 】 神田 佳明

【 養護教諭 】 大山 洋子

【 教 諭 】

〈小学部〉

磯川あけみ

大崎由香里◎

新井 清健○

今井あゆり

仙石 大吾

永倉 充

飯田 貴子

関根 貴博

西野 碧

岩崎 有香

春日 知花

竜野 航宇

〈中学部〉

柳澤 真美

三浦 駿介○

加藤 智子

丸山 赳史

谷内田 怜

平井 捺稀

大迫 利衣

加藤 智子

村瀬太一朗

加藤 和子

吉田 祥子

鈴木 健太

〈高等部〉

田上 智明☆

神保まなみ○

綿谷 衛○

遠山 秀雄

永山 宏平

栗原 悦子

安藤 剛史

松尾 紫織

佐藤 容亮

戸張 真衣

森 智彩登

○：研究推進係

☆：アドバイザー